

一 板を擔ぐ人々

世には頻と御幣を擔いで、騒ぎまはる人もありますが、亦大きな廣い板を擔いで、躍起になつてゐる者もあります。大工ぢやなからうし、指物師ぢやなからうし、木挽ぢやなからうし、手傳ではあるまいし、誰がそんな板を擔ぎ廻る者が居るか、と云ふものもあらうが。そんな事を云つてゐるのが、既に擔いで居るのかも知れぬ。東京の銀座のやうな、京都の京極のやうな賑かな町、アの中を廣い大きい板を肩にして通つた男「マア綺麗な美しい町ぢやこと、けれど惜しい事には片側町である。あれが兩方であつたら、どんなに結構であらう、片側が板塀ぢやで情ない」と云つたさうな。これが所謂板擔ぎで、擔板漢である。言葉荒く云へば

「咄這の擔板漢」

擔板漢と云へば男の事だけです、これは強ち男にばかり限りません。女にもある。強力なものです。擔板爺・擔板婆・擔板息子・擔板娘・擔板親爺・擔板嬢・擔板婿・擔板嫁・擔板親・擔板子・擔板嬰兒と云つた風に、何にでも通じます。

或狼狽者が水瓶を買ひに行つた。仰向にして置いては中に塵がたまるので皆俯向にしてある。「ウン此の水瓶は恰好はよいが、口がないな」。イエ口はあります」と起しかけて見せる「ア、底もないでないか」と叫んださうな。同様な男が足袋を穿かうとして、云何しても穿けぬ。「ヤイこの足袋は馬鹿に小さくなつたでないか」。「イエそれは、あなた右と左と違いますがネ」細君に注意されて「何！片つ方位違つてもかまはぬ」といふ。焉ぞ知らん、片方の違が兩方の違である。

矢張り恁んな男が旅をするとして、前晚用意を調べ、拂曉出立すべく脚絆を

つける。片方は甘く足に括りつけたが、片方は側の柱に巻き付けて出て行つた。晝頃風呂敷包を開いて見れば、辨當と思ひの外枕であつた。脚を見れば脚絆は片方ばかり。こいつ残念と引返して、散々叱りとばし、能くく見れば嬢と思ひの外、隣の婆さんであつた。恁んなのが所謂擔板漢でありませう。世に「惚れ易すの飽き易す」という俚諺がある。惚れるかと思ふと直ぐ飽きる。飽きるかと思ふと直ぐ他の者に惚れる。此は美しいお雛様のやうだと見込んで貰ひ受ける。妻として同棲すれば、段々とアラが知れる、屁もひる、糞もする。こんな筈ではなかつたと、「目についた女房やがて鼻につき」そろそろ秋風が吹き初めて、間もなく離縁沙汰。さらばとて「手にとらず矢張り野に置け蓮華草」向ふに花を眺めて、藝者狂や女郎買するも馬鹿の骨頂。何れは人間低い處に置いて上から見下した處は立派でも、高い處に置いて下から見上げたら大變、尻の穴が見えて拜まれた様ではない。美點ばかり見て惚込むのも、醜點ばかり見て逃出すのも、共に是れ兩面全體を知らぬ擔板漢、板を擔いで町の片側ばかり見て居る先生。

「勿體ないも卑しいから」。腐つたのや零れたのを、其の儘捨てるも勿體ないと搔込んで、腹を害ひ命を捨てる。勿體ないのなら、初から零さぬがよいでないか、腐らさぬがよいでないか。腹が減つたとて嚙まずに呑み込む。渴くからとて生水を啜り込む。お甘いからとて酒を注ぎ込む。甘いからとて菓子頬張る。珍らしいからとて肴を詰め込む。これも食欲に囚はれて、衛生も養生も打忘れた擔板漢。

「苦は樂の種、樂は苦の種」。樂ばかり欲がつて、樂を造る道を知らぬ働羅漢さん。「金あればあるに任せて欲くなる、なけりやないので尙ほしくなる」金ばかりほしがつて、金を儲ける道を知らぬ野良久良漢。「世の中は夢の世な

れば寝るもよし、假かりの世よなればまた借かるもよし。寝ねることばかり知しつて、借かりることばかり覺おぼえて、起おきることも返かへすことも忘わすれた厄やく介かい長ちやう者や。『味み噌そこの底そこに残のこりし大おほみそか、越こすに越こされずこされずにこす』。年としをこさずに年としに越こされる迂う闊くわつ坊ぼう先生せんせい。『後のちの世よと聞きけば遠とほきに似にたれども、知しらずや今け日かも其その日ひなるらん』。此この世よばかり見みて、未み來らいの見みえぬ有う耶や無む耶や大だい將しやう。何いづれも厚あつい四分ぶ六ぶ分ぶ、廣ひろい二尺しやく三尺しやくの一枚いちまい板いたを、セツセと擔かつぎ廻まはる連れん中ちゆうなのであります。